

Title	韓国半月形石刀の発生と展開
Sub Title	On the origin and development of Korean semilunar stone knives
Author	金, 元龍(Kim, Won-yong) 岡内, 三真(Okauchi, Mitsuzane)
Publisher	三田史学会
Publication year	1974
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.46, No.1 (1974. 6) ,p.1- 28
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19740600-0001">http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19740600-0001</a>

# 韓国半月形石刀の発生と展開

金 元 龍  
岡 内 三 真 訳

## I 序 言

いわゆる半月形石刀は、韓・中・日三国にまたがって分布する特徴ある石器で、特にそれが穀物の穂をきる農耕具という点で注意をひく存在である。わが国の半月形石刀については、一九六〇年 崔淑卿氏が総合的な考察をしたことがあり、<sup>(1)</sup> そのおおよその状況を知ることができる。しかし、その形式変遷や年代把握など、まだ未解決、または明らかでない点も残っているのが実状である。これは大部分の既往発見例が出土状況が明らかでない遊離したもので、従って伴出遺物の状態を確実に知ることができないところに根本的な原因があるためである。資料面におけるこのような制約は今までもどおり残されてはいるが、私はここで崔氏の論文とその後に知られた新例を資料として、わが国の半月形石刀の発生とその後の展開に関して考察してみることにしたのである。

筆者は従来、わが国の半月形石刀の発生を、龍山文化の伝統が陸路をへて伝播したものと考え<sup>(2)</sup> てきた。最近、日本の石毛直道氏は日本の石刀とともに韓国の半月形石刀は揚子江地方から対馬海流にのってわたってきたもので、それはまた稲作流入の経路であったと述べている。<sup>(3)</sup> しかし、結論からいうと、わが国の半月形石刀はすでに西谷正氏が指摘したように、<sup>(4)</sup>

やはり北方を通過して陸路で入ってきたものであるというのがより自然である。台湾まで入ってきた半月形石刀が琉球列島では発見されない事実も重要ではあるが、年代上にいくつかの不合理があり、石毛説は妥当でなさそうである。

## Ⅱ 形式分類

崔淑卿氏は韓国の石刀を主に刃の形式を基礎として、以下の四形式に大きく分類している。<sup>(5)</sup>

A  
A<sub>1</sub> 外彎刃凸背(杏仁形)  
A<sub>2</sub> 外彎刃直背(半月形)

B  
B<sub>1</sub> 直刃凸背(櫛形)  
B<sub>2</sub> 直刃直背(長方形)

C 二斜辺刃直背(三角形)

D 変移形(不整長方形→不整長楕円形)

しかし、これをもう少し整理し、形式発展の順序をも考慮に入れて、私は次の六種類に分類してみたいと思う。

1. 長方形
2. 櫛形(直刃外彎背・内彎刃を含む)
3. 魚形(外彎刃・外彎背)
4. 短舟形(直背外彎刃正常形)
5. 長舟形(直背外彎刃横長形)
6. 三角形(直背・双辺刃)

# 1 長方形

中国仰韶期に出現し龍山期に続く長方形石刀に関連ある古い型の伝統をもつ形式である。<sup>(6)</sup>一孔、双孔または無孔のものがあり、刃部は片刃もあるが両刃が圧倒的である。

# 2 櫛形

これは外彎背に直刃がついた形態で、中国では長方形の次に龍山期にあらわれる形式である。一ないし二孔があり、片刃が圧倒的である。

# 3 魚形

外彎背・外彎刃で、典型的なものは眼形または杏仁形になる。発生的には直刃の櫛形から次の外彎刃直背形（舟形）に移っていく過渡的な形式と考えられる。しかし、典型的な魚形石刀の例は非常に稀である。この形式は前記の石毛氏によれば中国では満州、とくに遼東半島に多く、ここではみな片刃・双孔形式である。後で出てくる長舟形式中に背が軽く外彎した例があるが、これは石刀が横長になり幅が狭くなって作業上不便であるために、その矯正策として中央部の幅を広くしたためと考えられ、魚形石刀の伝統を引きついだものではないと見るべきである。従ってこのような軽微な外彎背の長舟形石刀はここに包含しておらず、長舟形石刀中にみな包含させている。

# 4 短舟形

直背外彎刃形で双孔、片刃、刀長と刀幅の比は三対一前後である。これは前記魚形から更に変化したものと考えられ、これが横長になったものが次の長舟形である。

# 5 長舟形

短舟形と同形式ながら刀長が長くなり、長さとの幅の比例が四対一前後になる。そしてその不安定な形態を矯正するため

に背が軽く外彎するものも少なくない。また刀の一方の面側が二個の面になるように段を作り、磨研したものもある。要するに、わが国の半月形石刀としては最も後出の形式となるが、最も多く存在するものこの形式である。

### 6 三角 形

短舟形石刀の外彎刃を中央部で接する二個の直線斜刃に作ったもので、弧形刃の製作過程を簡略化するためのものと考えられる。刃はみな片刃であるが研磨した面が同一面でなくて反対になるように作っているのが特異である。やはり、石刀としては後出形式といえよう。

## Ⅲ 分 布 状 況

以上のような形式分類の下に各形式の出土分布表を作成したのが表(1)である。大きさ・石材・伴出物などの精密な表を作ってみようとしたが、文献内容に不備な点が多く、とりあえず半月形石刀自体を主とする表に作らざるを得なかった。ここにあらわれた半月形石刀の数は二〇〇個余りになるが、北韓関係文献があまりに不足し、南韓でも発表されていない遊離例が少なくないため、実在の数はこれよりはるかに増加するはずである。また形式分類においては、石刀の現在の形態が使用磨損等による変形と認められる時は、その推定原形を当該石刀の形式とした。

表(2)は、この表(1)を地域別に分類整理したものである。

この表によって次のような点を知ることができる。

- 1 長方形石刀は江原道・平安南道・平安北道にもあるが、咸鏡北道が圧倒的に多い。
- 2 楕形は忠清道・江原道を除く全地域で出土するが、平安北道の鴨緑江岸地域に一層普遍的で、また時代がさかのぼる例が多く分布している。

図 1. 半月形石刀分布図

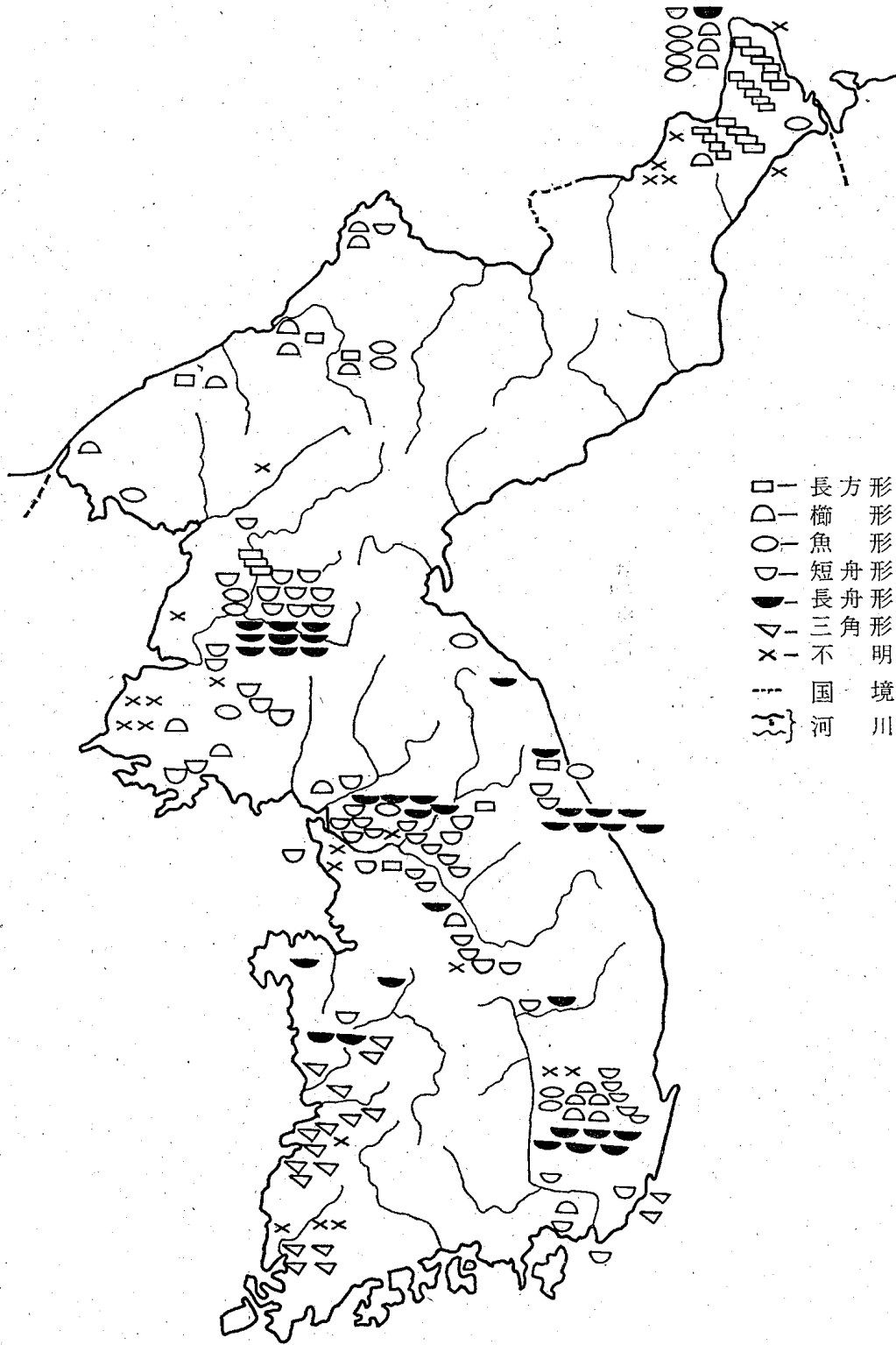


表 1.

韓 国 内 半 月 形 石 刀 出 土 表

地 名	半月形石刀						石 劍	石 鏃	石 斧	抉入石斧	無文土器	其他土器	遺 蹟	文 献	
	長方形	橢形	魚形	短舟形	長舟形	三角形									
ソウル市城東区 岩寺洞	1			2								橢文土器		1.4	
"    廣壯洞				1										1	
"    鷹峰洞				1								▽		4	
"    九宜里						1	▽	▽						1	
東大門区 忘憂洞				1	1								南式石支石?	2	
"    北 側			1	3	1									1.4	
城北区 月谷洞				2										4	
京畿道始興郡安養飛山洞				1										1	
高陽郡元堂面				1										1	
任川市鶴翼洞						1		▽				▽	北式石支石	1.2	
"    萬石洞						▽		▽				▽		6	
驪州郡占東面欣岩里		1	△	3				▽	▽	▽		▽	変形文橢文	未発表資料	
坡州郡州内面白石里		1											北式石支石	4	
交河面交河里				1	2									22	
月籠面玉石里					1		▽						北式石支石?	22	
楊州郡漢金面芝錦里				3					2					4	
和道面芝屯里					1									1	
別内面白羊里				1										4	
九里面仁倉里			1	1										1	
楊平郡竜門面曹峴里								1	1				石室墓	23	
富川郡北鳥面信島				1								橢文土器		6	打無 製孔
忠清北道															
清原郡江内面石花里							▽							1	
堤川郡清風面美石里				1									?式石支石	22	
忠清南道瑞山邑役山					1			▽	▽		▽			1	
舒川郡東面						1								1	
扶余邑旧衙里						1								1	
扶余郡窺岩面午水里						1								1	
"    羅福里				1	2									1.9	弯形
天安市斗井里				1	1			1		▽				5	双刃刀
全羅北道															
高敞郡大山面支石里							▽							6	
"    茂長面校興里						1								3	
扶安郡東津面堂役里						1								7	
"    舟山面所山里						4			3					7	

井邑郡德川面下鶴里 佳井部落					3			1	黒陶 金海	井址	7
全羅南道											
光山郡林谷面新竜里					2						6
務安郡石津面花山洞					1						6
靈岩郡始終面月松里					4	√	√	√	金海 土器		27
慶尚南道											
釜山市 東三洞			1						櫛文 土器	任孝宰	
金海郡金海邑会峴里	1		1								24
蔚山郡下尉面蔣峴里			1	2		2		√			8.9
密陽郡密陽邑馬岩山	1										1
慶尚北道											
月城郡川北面花山里		1			1						19
"    吾也里	1	△									1.10
"    神堂里			2								10
内東面九政里				1							10
"    矢里				1						私蔵	10
江東面毛西里	1										10
陽北面台本里			1								10
外東面掛陵里					1						1
見谷面下邱里	1										1.9
面・里 不明	2	1	1	4							10
榮州郡安定面安心洞				1		√	√		√		6
醴泉郡甘泉面県内里			1								1
江原道											
高城郡梧笠面巨津里				1		√	√	√			12
江陵郡丁東面雲亭里	1		1			√	√				11
江陵郡内				1				√			11
江陵市浦南洞			1	9			銅鍬	√			13
襄陽郡巽陽面密陽里				1		√	√	√			11
春城郡新南面退溪里	1					√		√			11
"    新北面泉田里				1		√				堅穴 住居	11
通川郡 通川邑 鉢山			1								11
原州市 台庄洞				1							1
平安北道											
碧潼郡 松蓮里	1	1	△				√				21(62-1)
時中郡 深貴里			1								21(61-5)
"    三貴里	1		1	△							"
中江郡 土城里			1	1		√					"
"    チャンソン里			1				√				21(61-6)
竜川郡 新岩里	1	1							櫛文 刻文		20(63-1)

鉄片  
両側には刃有  
短舟形の磨損  
変形



江界市	公貴里	1	1	2				▽	櫛文 彩陶	住居 址	25	
宣山	ウオンボン里	△	△	1				▽			20(64-1)	
寧辺郡	細竹里			3							26	
平安南道	平壤 美林里			2	5	5					3.9	
	" 土城内			1							3	
	" 立石里			1				▽			21(61-4)	
	" 清湖里	3									14	
	" ワサン洞	△			4			▽			21(61-6)	
大同郡	竜淵面 柳里				1						3	
竜岡郡	梅山里					1					3	
价川郡	墨房里			1					有文 長頸	変形 支石	21(61-2)	
黄海道												
安岳郡	安岳邑通山洞			1							15	
	" 板五里						▽				15	
信川郡	信川邑雨靈里		1					▽			1	
殷栗郡	北部面雲山里							▽			1	
海州市	南山		1								1	
黄州郡	沈村里			1						二 号 住 居 址	1	
	" 天柱面 外斗里			1							26	
黄州郡内				1				▽			3	
碧城郡	二道浦里			2				▽			21(61-6)	
鳳山郡	新興洞		1					▽			20(64-1)	一 孔
松林邑	ソクタン里			1					紅陶 ▽		20(64-3)	
長湍郡	竜淵面 ソクキョ里							▽			21(60-3)	
	" 大枚面撐石洞							▽			1	
松禾郡	蓮井面岳山里							▽			3	
咸鏡北道	会寧 壹洞	1									16	一 孔
	二洞	1									16	
	五洞	2	1								1.19	無孔2. 二孔1. 孔名1.
	沙乙	△							櫛文 紅陶		19.28	
会寧郡	鳳儀面 南山								櫛文		6.28	
鍾城郡	南山面上三峰洞	2	3	1		△					18.19	
	下三峰	5	1	1		△					18	
	行營面 地境洞	1	1								18	
	鍾城面 鍾関洞	△	1	1							19	
慶源郡内		△									1	
慶興郡	雄基面松平洞			1		△					16	
穩城郡	永忠面北蒼坪洞										16	
羅津市	草島										6	

茂山郡虎谷					3				紅陶	17.28
清津 農圃洞 元帥台					貝刀				彩陶 櫛文	28

韓国半月形石刀の発生と展開

- 備考：1. 数字は発見数量  
 2. √記号は数量不明  
 3. 他の文献においても、地名が不明なものは除外した。  
 4. △は両刃

表(1)参考文献：

1. 崔淑卿、「韓国摘穂石刀の研究」(歴史学報 13輯 1960. 10)
2. 三上次男、満鮮原始墳墓の研究 東京 1961
3. 国立博物館所蔵品、カード又は記録其他
4. 横山将三郎蒐集品及び野帳
5. 尹武柄、「天安斗井里の竪穴住居址」美術資料 8号 (63.12)
6. 金元竜、韓国史前遺蹟遺物地名表 (1965)
7. 全羅北道誌 上 (歴史編第一章金元竜全栄来、〈1969〉)
8. 金元竜、「蔚山郡下廂面蔣峴里出土の石器土器」(黄義敦先生古稀記念史学論叢 〈1960〉)
9. 山本博、「西日本弥生式問題」(考古学雑誌 25—10、,1935)
10. 斎藤忠、「慶州附近の磨石器」(考古学 8—7、1937)
11. 有光教一、「江原道の先史時代遺物」(考古学雑誌 28—11、1938)
12. 沢俊一、「鎔範出土の二遺跡」(考古学 8—4、1937)
13. 李蘭暎、「江陵市南浦洞出土先史時代遺物」(歴史学報 24輯、1964. 7)
14. 小野忠明、「朝鮮大同江岸櫛目文土器に随伴する石器」(考古学 8—4、1937)
15. 大正五年度古蹟調査報告
16. 日本石器時代地名表 第5版
17. 方善桂、「韓国巨石制の問題」(史学研究 20、1968)
18. 榎本亀次郎、「北鮮石器資料」(考古学 6—5、1968)
19. 石毛直道、「日本稲作系譜」史林 51—5、6 (1968)
20. 考古民俗
21. 文化遺産
22. 国立博物館、韓国支石墓研究 (ソウル、1967)
23. 有光教一、朝鮮磨製石剣の研究 (1959)
24. 大正九年度古蹟調査報告
25. 江界市公貴里遺蹟発掘報告 (1959)
26. 後藤直、「西朝鮮の無文土器について」考古学研究 17—4 (1971.3) pp. 36—65
27. 金元竜、「靈岩月松里の石器・土器」震檀学報 24 (1963.8) pp.131—148
28. 榎本杜人、「咸北先史遺蹟の調査(2)」朝鮮学報 47 (1968)

(九)

九

表 2. 半月形石刀各形式地域別出土表

	長方形	楯形	魚形	短舟形	長舟形	三角形	不明	計
ソウル・京畿	1	2	2	21	7		6<	39
忠 北				1			1<	2
忠 南				1	4	3		8
全 北						9		9
全 南						4	3	7
慶 南		2		2		2		6
慶 北		5	2	5	7			19
江 原	2		2	4	10			18
平 北	3	7	6	1				17
平 南	3		2	8	10		1<	24
黄 海		2	1	7			5<	15
咸 北	20	4	5	1	1		6<	37
計	29	22	20	51	39	18	22<	201

- 3 魚形は忠清道・全羅道・慶尚南道などの南部地域を除くと北部各地で出土し、特に平安北道・咸鏡北道に多い。
- 4 短舟形は全羅北道を除く各地で出土するが、特にソウル・京畿道に集中していて、その地域自体のなかでも圧倒的に多い形式になっている。
- 5 長舟形は忠清北道・全羅道・慶尚南道などの南部および黄海道を除く各地で出土し、その発見数は短舟形の次に多い。
- 6 三角形石刀は錦江下流から栄山江下流に至る湖南平野海岸地帯に集中していて、その他の地区では慶尚南道の蔚山に出土例が知られるのみである。
- 7 道別にみると、ソウル・京畿が発見量が最も多く、次は咸鏡北道・平安南道の順である。
- 8 豆満江下流の会寧地区、大同江下流のピョンヤン地区、漢江下流のソウル地区、そして慶州平野が石刀の四大集中地となっている。
- 9 長方形と楯形などの中国式形式、そしてそれから

出発した魚形は大体北部に集まっている。特に櫛形が鴨緑江岸に展開していることが注目される。

10 洛東江下流、湖南平野など、常識的な栽稻中心地ではかえって半月形石刀の発見数が少なく、また後出形式が主にあらわれている。

#### IV 編年および序列

先に形式分類の項で中国の石刀と対比してまた型式学的考慮の上から、韓国の半月形石刀の各形式の新古の序列を長方形、櫛形、魚形、短舟形、長舟形、三角形の順に仮定したが、いまここでそれらの年代を考察してみようと思う。

##### 1 長方形石刀

古式の一孔式と龍山期に出てくる二孔式がともに出土するが、この形式の中心地は咸鏡北道で、ここでは石刀が櫛文土器、雷文土器、彩陶、紅陶などいろいろの形式の土器と混じって出ている。その時期は大体、櫛文末期から彩陶・紅陶期にわたることを知ることができる。<sup>(8)</sup>咸鏡道地方に対する中国の彩陶の影響は櫛文土器時代に始まり、いわゆる雷文土器の発生を私はこの彩陶の影響のためであろうとみている。彩陶の豆満江地方到着の年代はどうみても西紀前第一千年紀以前なので、長方形石刀はこの彩陶とともにここに到着したようである。

赤峰第一次文化期（彩陶文化）は中国の彩陶と豆満江の彩陶との一仲継点になっていたようであるが、ここでも長方形石刀が出土し、また義州美松里下層<sup>(9)</sup>でみるようなジグザグ文平底櫛文土器があらわれている。<sup>(10)</sup>

このように美松里下層期、すなわち私のいう櫛文土器Ⅱ期には、彩陶と長方形石刀が赤峰をへて満州を横断する直線コースをとって豆満江下流地方に入ってきたと思われる。ここではこの長方形石刀が変りなく継続して鉄器時代まで使用された。私は櫛文土器Ⅱ期の実年代をB.C. 一七〇〇〜一六〇〇年頃からB.C. 七〇〇〜六〇〇頃までの約一千年とみてい

る。<sup>(11)</sup>それで。前にも指摘したが、豆満江地方への彩陶・長方形石刀の最初の到着は、遅くともB.C. 一五〇〇〜一〇〇〇年間のことであったと考えられるのである。平安南道清湖里の櫛文土器遺跡での長方形石刀の出土は、更にこれを裏付けるものである。<sup>(12)</sup>

## 2 櫛形石刀

これは中国では龍山文化とともに発生したが、その文化の拡散にともなって周辺地区に及んでいるもので、赤峰では青銅器を伴出する第二文化期からあらわれる。<sup>(13)</sup>この赤峰第二文化期はB.C. 一〇〇〇年を越えないが、紅陶および瓦鬲の存在からみて戦国時代よりは大体先行するものである。『赤峰紅山後』の報告者たちがその時代を秦漢と平行するとしているのは、その下限をいうものと解釈されねばならないのである。<sup>(14)</sup>従って櫛形石刀の満蒙地方における年代は青銅器の存在を考慮に入れてもB.C. 七〇〇〜六〇〇年頃まではさかのぼって定めることができる。わが国の鴨緑江地区の櫛形石刀も年代の上限をその頃に、定めることができるのである。事実、平安北道中江郡土城里、長城里や、特に平安北道龍川郡新岩里では櫛形石刀が「無文土器」の最古の形式の土器とともに出土する。新岩里第I文化層の土器は幾何学的刻文で裝飾した長頸双耳壺で、その中には遼東半島で出る類の彩色土器片もまじっている。<sup>(15)</sup>従って、このような刻文長頸壺類は彩文土器と関連するという点で、咸北地方の雷文土器と同じ性格のものといえよう。実際にその文様の中には雷文といえるものが存在している。そのため、新岩里Iは、遅くとも櫛文土器終末期以前のもので、その実年代はB.C. 第一千年紀の初頭を下らないものである。

このように、櫛形石刀が後期櫛文土器の時期にすでに存在しているというのは、南韓での状況からも傍証されるところである。筆者の直接蒐集した資料によれば、京畿道富川郡信島で片岩製短舟形石刀（未完成品のように打製で無孔）一個が後期櫛文土器貝塚から出土し、釜山市東三洞貝塚でも上層から有孔短舟形磨製石刀が任孝宰氏によって採集されたこと

がある。一方、金海貝塚などの遺跡で発見される若干の楕形石刀はこの古式形式と関連するものではなく、鉄器時代に入ってからわが国に入ってきた中国の鉄製楕形刀を石で模造したものと思われる。従って、古式楕形石刀とは直結しないものである。

### 3 魚形

魚形は形式上楕形の刃部が外彎したものであることは前に指摘したとおりであるが、これはわが国では中部以北でのみ出土し、特に平北・咸北で多く出土している。一方この形式は山東省から遼東半島にかけて海岸地帯新石器時代遺跡で多く発見されており、特に遼東ではみな片刃二孔である点がわが国と共通し、この魚形が南満州から鴨緑江流域にかけての地方で発生したことをものがたっている。またその時期が長方形や龍山型楕形刀より遅いということは、それが仰韶や龍山文化の中心地では発見されないという事実から知ることができるのである。そのため、この形式の石刀はやはり形式上近似している楕形刀から変化した遼東形式ともいうことができ、この地域で韓国式の片刃短舟形石刀の祖型が発生したといえる。

このようにして出現したこの魚形石刀がわが国の北部地方でのみ一部使用されるうちに、すぐ舟形直背外彎刃形式に転化して消滅したものと思われる。

### 4 短舟形

石毛直道氏はこの短舟形石刀（氏のC類半月形外彎刃石刀）に関して、それが遼東半島には少ないが長江下流のデルタ地帯には多いと指摘している。その源流については、「C類半月形外彎刃石庖丁の最初に出現するのは、龍山文化のもっとも古い時期にあたる廟底溝第二期文化においてであるが、ここより出土したのは二例にすぎず、いずれも擦切法によって一孔をうがったものであり、鑽孔法によって穿孔を行う龍山文化期以後の有孔石庖丁とは別の系統に入り、形態も整っ

たものとはいえない。その後の中原の龍山文化に、半月形外彎刃型式がほとんど出現しないことから、廟底溝第二期文化の半月形外彎形式のものから、周辺地帯のこの型式が影響をうけたものとは考えられない。」として、短舟形は遼東地方のものも揚子江地方のものも、みなその地方で単独発生した独立形式であることを示唆しながら、その直接の祖型に関しては遼東半島に関する限り、魚形から派生したものとみている。<sup>(17)</sup>

この点は筆者も同意見であるが、一歩進んで、魚形からの転化は遼東に局限されるのではなく、鴨緑江地方も含む南満州と北韓地域で達成されたとみるものである。そして、これが朝鮮半島全域に及んだものと考えられる。しかし、石毛氏は韓国の短舟形石刀を遼東とは分離して、それが揚子江地方から稲とともに北九州、南韓に到来したとみている。<sup>(18)</sup> その場合、日本の石刀は年代の上限が西紀前三世紀であるために、韓国の石刀もそれ以上にはさかのぼれなくなり、不合理が生じる。すなわち、前にも指摘したように、信島・東三洞などの後期櫛文土器文化期遺跡には短舟形石刀が存在している、年代的に矛盾が生じるのである。また北九州ではこの石刀は弥生文化に伴うが、弥生文化は基本的に朝鮮半島からの影響によるものであるから、石刀のみ別に離れて揚子江から入ってきたというのも不自然である。それで結局、短舟形石刀は南満州と北韓の石刀で、それが南韓をへて北九州へ入っていったとみるのが合理的な見解と考えるのである。

さて、この形式の石刀の出現年代であるが、朝鮮半島での状況は遅くとも西紀前第一千年紀の前半頃には出現していたと思われ、遼東と鴨緑江地方では魚形石刀出現とほとんど時を同じくして現われたとみななければならないのである。しかし、韓国内でのこの石刀の繁栄期は紀元前第一千年紀の後半頃とみるべきであり、地域によっては地方形式として長期間存続した可能性が濃い。

しかし、これが金海期まで続いたとは考えられず、鉄器が入ってきた頃であるB.C.三〇〇年前後には、長舟形とほぼ交替し終わったのではないかと推測される。ただ、B.C.三〇〇年頃に日本にわたった石刀はすなわちこの短舟形式であ

り、従ってB.C.三〇〇年以後にも暫く韓国南部地方の主要な石刀として存続したと考えられる。

## 5 長舟形石刀

これはその形態上明らかに短舟形から発達した形式と思われる、そのような点から次の三角形石刀とともに韓国石刀序列の末尾にくる形式である。表でみるように江陵市浦南洞住居址では銅鏃、鉄片、二個の短舟形石刀とともに九個の長舟形石刀が出土している。それは青銅Ⅱ期（鉄器Ⅰ）に属する段階で、実年代が大体B.C.三〇〇年以後であることをもがたっている。しかし、長舟形石刀は金海期の遺跡からは出ていないので、年代の下限は西暦紀元前後より下ることはない。結局、この石刀は西暦紀元前の約三〜二世紀の間使用されたものといえることができる。

## 6 三角形石刀

三角形石刀は短舟形石刀の弧形刃製作を簡略化した過程で発生した新形式であると思われる。蔚山での一例を除けば他の形式と共存せず、他の石器では抉入石斧と共存する場合がある。表でみるように、天安斗井里では長舟形と抉入石斧が共存しているが、この長舟形は一方の側辺にも刃を作り、実質的に双辺刃になっている。それは形態は異なるが、三角形石刀と基本的に通じている形式といえよう。抉入石斧についてはまだ正確な分析的研究が出てはいないが、この石器は無文土器の後期にはじめてあらわれるとみられるものである。ここで三角形石刀のみ伴出するのはその実年代の降ることを一層よく示しているようである。ところで、三角形石刀は井邑と靈岩の場合には金海式土器と共存しており、蔚山では石製銅劍把頭飾と伴出していて、その時期はやはり青銅器Ⅱ期から金海期にわたるものと考えられる。また先にも言及したとおり、この形式は西南海岸地帯に集中した、いわば湖南地方形式ともいえる特殊形式である。特に全羅南・北道ではこの形式しか出てこないが、これは他の形式の石刀が消滅する頃、突然あらわれたことを物語るものであろうか。もし半月形石刀を農耕と直結させるならば、全羅道地方は農耕開始が最も遅いことになる。半月形石刀が北から伝わるにしても



南から入ってくるにしても、なぜこの農耕に最適な平野のある湖南地方に入ってきたのであろうか。

それはともかく、以上が韓国石刀の各形式のおよその編年であるが、資料の性質上、不正確な点がある。結果を要約し  
図示すると次のようなものになる。(一七頁参照)

## V 隣接地域の石刀

順序が逆になるかもしれないが、ここで隣接地域すなわち満州、中国、日本などの地域における半月形石刀の様相を概観し、わが国のものと比較してみることにする。これに関しては前出の石毛氏の論文が最もよく整理されているので、これに依拠して要点のみを以下に列記する。

### (1) 中 国

- 1 長方形：仰韶期からあらわれ、龍山期に至って揚子江地方にまで波及する。
- 2 楕 形：龍山文化に多い形式で、山東・遼寧・吉林・熱河・河南などの地に分布し、揚子江地方でもあらわれる。
- 3 魚 形：満州に多く、遼東半島での出土例はみな片刃二孔形式である。
- 4 短舟形：遼東半島で片刃形が出ているが、両刃形まで合せて山東半島でも出土し、特に揚子江下流で多く出る。揚子江地方での年代は、石器時代末期から金属器初期にかけて、実年代ではB.C.一〇〇〇〜三〇〇〇年頃になる。
- 5 長舟形：満州吉林で少数例が発見されている。ここでは石棺墓から出土し、その年代の上限はB.C.五〇〇年頃である。<sup>(19)</sup>

以上のように、長方形・楕形・魚形・短舟形などがみな遼東地方から出土している。特にそれが片刃である点でわが国のものと共通することを示している。従って、わが国の短舟形石刀を必ずしも揚子江地方と関連させねばならない積極的

図 2-1 石庖丁形式発展

韓国半月形石刀の発生と展開

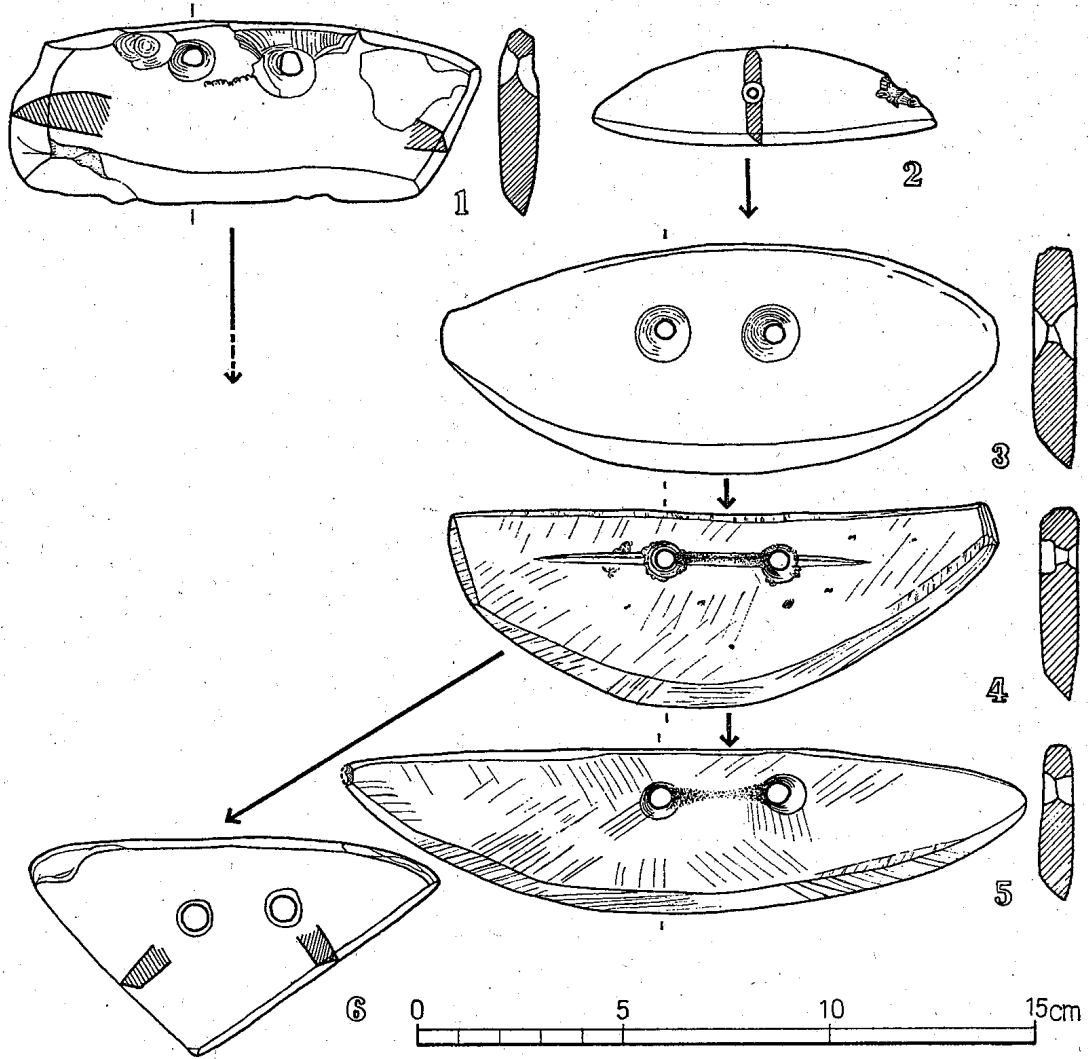
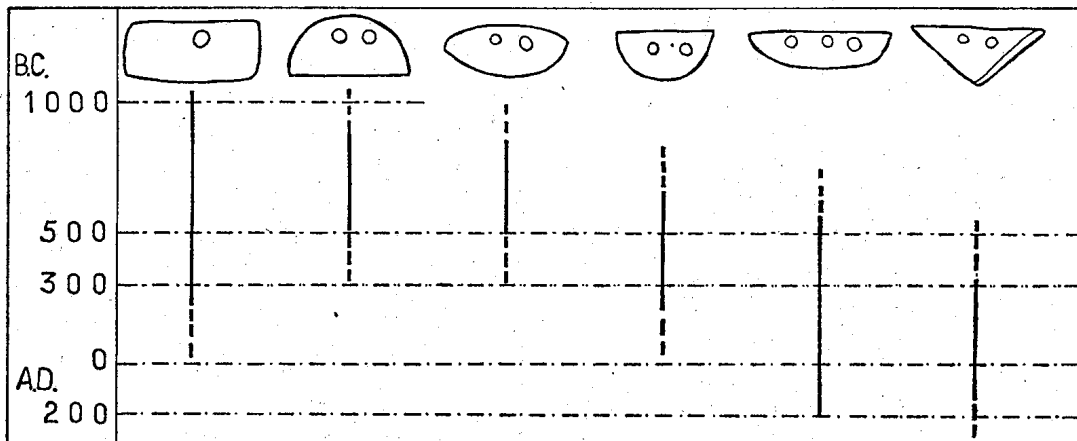


図 2-2 編年と順序

(一七)

一七



な理由がなく、むしろわが国は満州を通して中国の石刀伝統と初めから結びついていったといえる。

ただ吉林地方の長舟形石刀はわが国の長舟形石刀とは関係なく、別途に発展したものとみななければならないようである。

(2) 日 本

日本では北九州ではほゞB.C.三世紀初頭、弥生時代の最古期から短舟形石刀があらわれるが、刃は両刃と片刃が並存する。そのうち、弥生中期——西暦紀元前後になって、少数であるが長方形・楕形・魚形があらわれ、それが次々に東方に及んでいった。そして中央部日本、いわゆる畿内地方では弥生前期には短舟形が若干存在するが、北九州地方にはまったくない曲背内彎刃、すなわち鎌形石刀が流行する。<sup>(20)</sup>そして北九州でも三角形石刀が出るが、これはわが国の湖南の三角形石刀と製作技術上の共通性があり、やはり互いに関連しているようにみえる。<sup>(21)</sup>

このように、日本では状況が少し複雑であるが、日本に最初にあらわれる形式が北九州の短舟形石刀であることはまちがいになく、それが約一〜二世紀ほど継続するうちに長方形・楕形・魚形などの古形式のものが何らかの理由で復活したり自然発生的に生じたものと推測される。

前述のとおり、北九州の短舟形石刀は年代的に、地理学的に、また当時の文化の背景上、やはり朝鮮半島から渡来したものとみななければならない。揚子江地方から米と半月形石刀が九州や南韓に渡来した機会は勿論あったであろうが、日本の弥生文化が南韓からの刺戟によってB.C.三〇〇年頃にまず形成されているとみると、揚子江地方から海を越えての文化の渡来はB.C.三〇〇年以後、おそらく漢代以後のことではなかったかと考えられるのである。そうすると、揚子江地方から米と半月形石刀が北九州や南韓に到来した時には、すでにこの地方には陸路を通じて北から下ってきた米と短舟形・長舟形石刀が存在していたのが実情であったと考えられるのである。

稲の渡来は南北二路によるが、やはり北路が一步はやかっただのである。

## VI 結 語

以上でみるように、朝鮮半島にはB.C. 一〇〇〇年前後に中国の彩陶文化の所産である長方形石刀が満州を横断する直線コースを通過して豆満江下流域域に入ってきて定着した。続いて紀元前第一千年紀初頭頃には龍山文化の所産である楕形石刀が入ってきて、鴨緑江一帯に広がった。しかし、遼東と鴨緑江地方ではこの楕形が更に魚形に変化して、B.C. 五〇〇年頃を前後してそれが更に短舟形、すなわち典型的な直背外彎刃の片刃石刀に転化し、これが以後約二〜三世紀のあいだに全国に広がりつつ日本の北九州にわたっていった。長舟形石刀はこの短舟形から更に発展したもので、その使用時期は紀元前の二〜三世紀間に当る。湖南の海岸地帯では殆ど同じ時期から西暦紀元初頭にかけて短舟形を簡略化した三角形石刀が流行した。

半月形石刀はこのような背景からみて最初から栽稻に関連した可能性があるとはいえ、韓国では初めは畑作と関連した道具であり、それが栽稻と本格的に関係をもつようになるのはB.C. 三〇〇年前後からであると思われる。また揚子江地方の半月形石刀が南韓に入ってきた可能性も充分あるが、これは北九州に弥生文化が発生したB.C. 三〇〇年以後のことである。そのような海上交通は漢代以後に形成されたものであり、揚子江の石刀は北九州やわが国に最初に入ってきた半月形石刀ではないと考えられるのである。

一九七三年九月二四日訳了

### 注

- 1 崔淑卿「韓国摘穂石刀の研究」『歴史学報』一三輯（一九六〇・一〇）、頁三三〜五四
- 2 金元龍「韓国栽稻起源についての一考察」『農檀学報』二六・二七合輯（一九六五・一二）、頁三〇一〜三〇八
- 3 石毛直道「日本稻作の系譜」『史林』五一卷五号、六号（一九六八・九、一一）、頁一三〇〜一五〇、九六〜一二七
- 4 西谷正「朝鮮半島に於ける初期稻作」『考古学研究』一六一（一九六九・一〇）、頁一〇二〜一一〇
- 5 崔淑卿、注「前掲論文、頁二六〜二八

- 6 安志敏「中国古代の石刀」『考古学報』第十冊(一九五五)、頁二七〇五、頁三二〇三および石毛直道、注三前掲論文
  - 7 金元龍「靈岩月松里の石器文化」『震檀学報』二四輯(一九六三・八)、頁一三二一―一四八
  - 8 樫本杜人「咸北先史遺跡の調査(二)」『朝鮮学報』四七輯(一九六八)、頁九三〇―一〇二二
  - 9 金用珩「美松里遺跡の考古学的位置」『朝鮮学報』二六輯(一九六一)、頁一〇二四、図二の三
  - 10 『赤峰紅山後』(東方考古学叢刊甲種第六冊)(一九三七)、P.L. 三九およびP.L. 四一の四二―四六
  - 11 金元竜著、西谷正訳『韓国考古学概論』(一九七二・東京)、頁五一―五六
  - 12 小野忠明「朝鮮大同江岸櫛目文土器に随伴する石器」『考古学』八一四(一九三七)、頁一八四
  - 13 『赤峰紅山後』図二七
  - 14 『赤峰紅山後』頁七七
  - 15 後藤直「西朝鮮の無文土器について」『考古学研究』一七一―四(一九七一・四)、頁四五
  - 16 注一五前掲書 頁一〇五および注六前掲書 頁四〇
  - 17 注三前掲書 頁一〇四
  - 18 注三前掲書 頁一一二
  - 19 三上次男『満鮮原始墳墓の研究』(一九六一・東京)、頁二九六―三二一
  - 20 森本六爾「石庖丁の諸型態と分布」『考古学評論』一一一(一九三四)
  - 21 注三前掲書 頁一四五
- すなわち、福岡県立岩を中心として、三角形石刀が群在するが、ここでも両刃を表裏別の面になるように作ったことは、わが国の湖南の例と同じで、偶然の一致とみるのは困難な点がある。しかし、どの面を先に作ったかということは、まだ断言するのが難しい。
- 訳者あとがき
- 本稿は、金元龍ソウル大学校教授が、韓国・檀国大学校史学会の機関誌『史学志』(第6輯・一九七二年)に発表された論考を全文訳したものである。
- かつて、金元龍氏は「韓国栽培稻起源についての一考察」という、水稻栽培に関する総合的な論文を発表したことがある、その折、石庖丁についても言及して、それは陸路を経て華北から稲作に伴って伝来したという所論を展開している。金氏は、今回はとりあげる対象を石庖丁に限定し、その型式分類・分布・編年を行なうことによって、朝鮮における初期農耕の実体を明らかにしようとして試みている。従って、本稿を読む際には、注二に掲げた金元龍氏の論文と、注四に引いた西谷正氏の論文とを一読されたい。とりわけ注一と注三に挙げている崔淑卿氏と石毛直道氏との論文は、石庖丁と真正面から取り組んだもので、本論と深いかわり

がある。それぞれの論考が、分布や年代・型式変遷や相互関係など、互いに相反する意見や異なる結論を導き出している。残念ながらここでは、三者各様の相違点その他についての比較や、こまかな差異を指摘し得るほど紙幅の余裕がない。そこで、不明な点は、読者各自が他の二論文を机上において、本論と併読されるよう望むものである。

まず、金元龍氏は、石庖丁を長方形・楕形・魚形・短舟形・長舟形・三角形の六型式に分類している。既に公にされている崔淑卿、石毛直道両氏の分類と異なるのは、半月形直背外彎刃石庖丁を、短舟形と長舟形に二分したことにある。ただ、短舟形と長舟形とを分類する基準が明示されておらず、集成図もないために、両者の形態上の細かな差異を、明確には知りたいのが難点である。加えて氏は、金海貝塚などで出土する楕形石庖丁は、中国の鉄製楕形刀を模倣した特殊な型式であり、ここで扱っている古式楕形石庖丁とは直結しない後出のものとしている。これは、楕形石庖丁を結果として古式と新式に分けることになり、朝鮮南部の楕形石庖丁のみが石庖丁形鉄器を模倣した石器とする分類になるので、多くの問題を含んでいるものといわざるを得ない。

次に各型式の石庖丁は、地域によって分布に濃淡があるが、特に、会寧地区・ピョンヤン地区・ソウル地区・慶州地区の四地域に集中した分布をみると述べている。そして、金氏の指摘のうちで、現在の水稻栽培中心地となっている湖南平野や洛東江下流の平野部には石庖丁の出土数が少なく、僅かな出土例も後出型式が

主であるという点は、注目すべきものであろう。日本では、弥生時代の水稻栽培が、まず河川下流の低湿地で開始され、低地から次第に高地へと移行していったと考えられている。朝鮮でも水稻栽培が、日本と同様に低湿地で始まったとすると、朝鮮南部の水稻栽培に適したこの平野部に、古式の石庖丁出土例が少ないことは、不可思議な現象といわざるを得ない。しかし、金氏は、何故この地域に古式石庖丁の出土例が少ないのかという問題に対しては、何ら説明を加えていない。

また金氏は、従来、無文土器にのみ伴出すると考えられていた石庖丁が、楕目文土器の末期（紀元前一千年前後）にまで遡って伴出するという事実を明示した。また、その下限を、青銅Ⅱ期（紀元前三百年以後）から金海期（西暦紀元初頭）にわたる時期とみている。そして、楕目文土器に伴う石庖丁は畑作に関連した農具であり、石庖丁が稲作と本格的な関係をもつのは、紀元前三百年前後の頃からであるとも述べている。これは、ほぼ妥当な見解とみることができ、何となれば、解放後の調査研究によって、収穫用具である石庖丁が、楕目文土器に伴出するという事実とは動かし難いものとなりつつある。石庖丁を収穫用具とする穀物としては、稲以外には、アワかヒエ・コウリヤンなどの類を考へることができよう。初期農耕で栽培された植物が、アワ・ヒエ以外に何があったかは、未だ充分には知られていないが、少なくとも水稻ではなかったと推察し得る。稲の収穫用具として石庖丁が用いられるようになるのは、楕目文土器の末期よりもすこし遅れ

る時期に至ってからのことであろう。

更に金氏は、各型式の石庖丁は、みな遼寧を通じて華北の石庖丁と関連があり、三角形石庖丁のみは、朝鮮南部で発生し北九州にまで伝播したとみなしている。そして、揚子江流域の石庖丁は漢代以後に渡来したもので、朝鮮や北九州に最初に入ってきた石庖丁ではないと結論づけている。ところで、三角形石庖丁の評価については訳者も異論はないが、石庖丁の総てを華北と関係づけるのは、いかがなものであろうか。しかも、稲作の渡来は南北二路により、北路のほうが石庖丁を伴って早く伝わったとする氏の考えには、かなり無理があるように思われる。すなわち、朝鮮北部・中部の石庖丁は、アワ・ヒエ・キビ・アズキなどの雑穀類を伴ない、畑作と関連するもののものである。朝鮮半島北部・中部の華北から伝わった石庖丁は、アワ・ヒエ・コウリヤンなどの穂摘具として使用されはしても、気候や地勢、他の石器との組み合わせ関係などからみて、この地域で稲の収穫用具として使用されたとは考えにくい点がある。朝鮮全域で雑穀類の穂摘具として使用されていた石庖丁が、朝鮮南部では稲の穂摘具へと転用され、やがてその収穫用具として定着化したものであろう。稲作の系統論は暫くおいて、今後、朝鮮における畑作から稲作への転換、これに伴う収穫用具（石庖丁）の変化のあとづけをなすことが望ましい。

なお最近届いた金元龍氏からの私信によると、「短舟形・長舟形という用語は、適切なものではないが、他によい表現を考えないので、今は便宜的に使っている」とのことである。

また、本論中の図1は金元龍氏の図を訳者がトレースし、一部記号を改めたところがある。同様に、図2-1は、氏の模式図を実測図に代えて表現したが、原本の図は、図2-2にみるような表現である。

図2-1の石庖丁の出所を明らかにしておく。

- 1 有光教一「朝鮮江原道の先史時代遺物」『考古学雑誌』二八卷一―二号、頁七―一三
- 2 安容淳（咸鏡南道）北青郡中里遺跡『考古民俗』一九六六―二、頁二六
- 3 斎藤忠「慶州付近発見の磨石器」『考古学』八卷七号、第三〇三

4・5は、京都大学文学部所蔵品で、訳者が実測した。観察によつて、二三興味のある事実を見出したので、やや詳しく後に述べて参考に供したい。

- 6 西谷正「三角形石庖丁について」『考古学論叢』一、頁一〇三

4に掲げた石庖丁は、慶尚北道慶州の出土という。遺物は、現在、京都大学文学部博物館に陳列されている。石毛直道が「日本稲作の系譜（下）」『史林』五一卷六号、一〇三頁にも実測図を掲載している。石毛氏の論文では、これについての具体的な説明がなく、他にも詳細な報告がなされたことのない遺物である。

訳者が観察して気付いた点を記し、ここに紹介しておこう。

なお石庖丁は片刃のついた面を上向におくとき、その上になる

面を表面といい、反対を裏面と呼ぶことにする。また左右という際には、向って右、向って左をさすことにする。同じく、上方というのは背の側で、下方というのは刃部の側を示すこととする。

## 形 態

片刃の刃部が外彎し、背部は直線をなし、双孔をもつ、片刃直線背外彎刃石廔丁である。背部は断面でみると肩をもっている。刃の左右両端は、中心に対して円弧を描かず、一定の角度をもつて削りとられている。孔は表裏の両面穿孔で二個作られており、双孔間の最短の器壁と器壁の間隔は二・三 $cm$ である。双孔の位置は、上下では背部寄り、左右では、ほぼ中央部にある。この石廔丁では、表面に双孔を連ねた凹溝のある点に特色がある。溝は長さ八・二 $cm$ 、幅〇・三 $cm$ 、深さ〇・一〇・二 $cm$ である。溝は断面でみると三角形をなし、背部側が傾斜してやや深く、刃部側はゆるやかである。溝は、双孔の間とその左右とでは、多少上下の角度に違いがあり、一直線にはなっていない。この石廔丁は黄褐色を呈し、少しザラつきのある石材を用いているが、正確な石質は不明である。長さ一三・四 $cm$ 、幅四・八 $cm$ 、厚さ〇・九 $cm$ で、重さは七五グラムである。

## 製 作

表裏両面の平坦部と背部や刃部、それと双孔には、製作時の敲打痕と研磨痕が残っている。これらを仔細に観察することによつ

て、石廔丁製作工程の一端を復原することが可能となる。

まず、表面の各所に敲打の痕が残っているが、左の溝にかかっている痕跡が最も大きなものである。しかし〇・五 $cm$ 平方よりは大きい、一 $cm$ 平方よりも小さい。表面に見出し得る他の敲打痕も、〇・五 $cm$ 平方を越す大きな例はない。敲打によって全体の形を整えた後で、この粗い成形痕を丁寧に研磨して消しとっている。同じく、表裏両面の双孔周縁にも敲打の痕が残っている。これは、穿孔部を表裏両面から敲打し、窪みを設けて薄くした後、錐状工具を用いて穿孔した工程を示している。表面からの錐による穿孔は、滑らかな二段の削磨の痕を残している。まず、敲打による窪みの中心に錐状工具をあて、その痕が直径が大きく円筒状に残るような削磨をかけ、さらに径の小さな臼状の痕の残る削磨穿孔を行なっている。はじめにいた円筒状の削磨痕は、穿孔部の厚みをとるための過程を示し、次の臼状削磨痕が孔の貫通を期したものであろう。ただし、錐状工具の尖端部を加工すれば、二度に分けず一度の作業でもこのような削磨痕の残る穿孔をすることが可能である。裏面の双孔には、穿孔の際に、錐状工具が回転時に傾いて穿孔の方向を誤ったためか、穿孔位置がずれたためかと思われる小さな臼状の窪みが残されている。表面からの第一次の穿孔には舞錐が用いられたとする推測も可能である。機械的かつ連続的で安定した回転運動を行ない、対象物に正円の孔をあけて同心円状の線条痕を孔の内壁に残す穿孔法は、舞錐法である。揉み錐やひねり錐では、これ程規則性のある安定した円筒状の穿



孔は得難いように思われる。表裏面の平坦部に施されたような成形のための敲打痕が双孔部にも遺存する事実は、表裏両面の調整の研磨が完全に終了してから、穿孔を開始したものとほみなし難い点がある。双孔の部分では、まず敲打によって穿孔部の位置を定めると共に石材の厚さを減じ、ついで錐状工具による削磨穿孔に移ったものと考えてよいであろう。従って、穿孔の作業にも数工程があり、その都度、使用工具を取り替え、使用法をもかえた可能性が強い。

刃部には、敲打痕がなく全面磨研によって粗く刃を研ぎだし、最後に目の細い砥石で仕上げの刃つけを行なっている。

表面の刃幅は $0 \cdot 3$  cm から  $0 \cdot 6$  cm 前後の片刃であるが、裏面も刃に近い部分を広い範囲に亘ってかく研磨している。刃の左右両端部は、弧を描かず、角度の異なる片刃の面をなしている。左端の刃部では、刃と直交する細かな研磨痕が残っている。右端の部分は、刃と平行する粗い研磨の痕が三〜四段をなしている。この部分は、刃をつけるといふよりも粗砥を数回に分けてかけており、通常の刃部にみる目の細かな砥石による線条の研磨痕がみられない。この部分は、刃部を粗く作り出したままの状態に近いものと考えられる。中央の弧をなす部分の刃は、右端に三段の少し粗い研ぎだしが残るほかは、全面に目の細かな線条の痕跡がある。中央から右では、刃と平行な研磨を施しており、中央部やや左寄りには刃部と $30 \sim 40$ 度の角度をなす研磨痕が残っている。左端に近い部分は、刃部と $25 \sim 30$ 度の角度で交わるよう

な研磨を施している。これら線条の痕跡は、刃つけのために施した研磨によるものであって、表裏両面の平坦部・刃部・背部の全面に観察されるので、穀類を摘んだ際の擦過痕によるものとは認められない。

直線背をした背部も、正確に言えば中央部がやや窪み、左右の端が少し高くなっている。中央部には、背の長軸に対して直角に交わる粗い研磨痕が残っている。背の左方では、長軸に平行する研磨があり、背の右には長軸に対して $60 \sim 70$ 度の角度をなす研磨痕が残っている。

石庖丁全面に観察される研磨痕からみて、少なくとも二種以上の目の異なる砥石が使用され、工程によって使い分けられていたものようである。

#### 使用痕

この石庖丁では、禾本科植物の珪酸によるとみられる光沢が、刃部の一部に認められる。しかし、穂摘みによって生じたと認定し得る擦痕や剝離・欠損部は見出し得なかった。むしろ、研磨痕の消滅や珪酸による光沢などで穂摘具としての使用痕を消極的に認め得るにすぎない。従って、刃部には、穂摘みによって生じた確実な使用痕を見出すことができない。これに対して双孔の周辺では、使用による紐ずれの痕が顕著である。表面では左孔の右外周縁部と右孔の左外周縁部とに磨滅が生じている。同じく裏面では、左右の双孔がともに上部、即ち背の側に寄った外周縁部に磨

滅を認めることができる。拡大鏡を用いて仔細に調べると、この磨滅は左右ともに背の肩部までのびている事実を看取することができた。更に、表面の凹溝は、左右の双孔に近づくほど磨滅が進んでいる。これは、左右の双孔を通り抜け、溝を通った紐によって生じた磨滅痕と認められる。これは、双孔間の紐が上下に動き、裏面で紐が伸縮するのを防ぎ、また、穂首が接触して紐が磨耗することを避けるための工夫であるかと推測される。ともかく、表面の凹溝は、最初から意図的にほられたもので、その目的は、紐と関連したものであったに相違ない。

5に挙げた石庖丁は、慶尚南道蔚山郡兵營の出土である。遺物は、朝鮮出土の他の石庖丁と共に、京都大学文学部博物館に展示されている。本例もまた前掲の石毛論文に図はあるが、詳細な解説がない資料であるから、ここに紹介しておく。

## 形 態

背部は上下にやや凹凸があるが、ほぼ直線を呈し、刃部は片刃で外彎している。上下の幅に比較して左右の長さが大きく、厚さが薄い石庖丁である。金元龍氏のいう長舟形石庖丁に該当する典型的な型式である。双孔は、表裏の両面から穿孔され、双孔間の最短距離は二・三cmである。双孔の位置は、上下では背部寄り、左右では右寄りとなっている。正確な石質は不明であるが、黄褐色を呈し滑らかで堅緻な石材である。長さ一六・六cm、幅四cm、厚さ〇・八cmで、重さが六五グラムである。

## 韓国半月形石刀の発生と展開

## 製 作

全面を平滑に研磨しており、製作時の敲打痕や剝離面は全く見られない。穿孔は、表裏両面から施し、その削磨痕は臼状を呈している。表面右の孔では、削磨痕が正円形をなさず左右不对称であり、孔の中心よりも右に削磨の広かかった部分が残っている。これは、裏面からの穿孔と貫通させて孔径を広げるために、錐状工具の角度を平坦面に対して直角よりも右に傾けて回転穿孔した結果生じたものと考えられる。他の穿孔周縁部にも、多かれ少なかれこうした錐状工具の傾斜による削磨痕の不均衡を認めることができる。こうした不整形の穿孔は、中心の定まった穿孔によるのではなく、片手のひねり錐または、中軸線を安定し得なかった採み錐によってなされたと考えている。

平坦面の研磨は、左方では右斜め上方向へ、中央部では上部方向へ、右寄りでは左斜め上方向へ線條痕が走っている。左端には、左右方向への研磨痕が遺存している。右端に近い部分では、刃部の稜の上方に刃と平行するいま一つの研磨した面がある。この部分にはやや右斜め上に傾いた線條痕が認められる。

刃部の研磨は、左寄り、中央部、右寄りに分けて行なっている。左寄りの刃部では、線條痕が左から右斜め上方向につき、中央部では刃と平行して左右に走る。右寄りでは、右から左斜め上方向に線條痕が残っている。裏面の刃部には、剝離した面がかなり遺存しているが、製作時のものではない。刃幅は〇・三cm〜〇・五

cm前後で、片刃づけである。刃部に残る線条痕が、刃つけの研磨によるものであり、使用痕でないことは前例と同じである。

### 使用痕

この石庖丁でも、硫酸による光沢と穿孔周辺の紐ずれの痕跡が認められる。まず、表面の双孔を結ぶ平坦面では、研磨で生じた線条痕が紐ずれのために消滅し、平滑になっている。また、左孔の右側、右孔の左側では、各々紐ずれのために、錐状工具による削磨穿孔痕が全く消え去っている。裏面では、左右の双孔ともに上方の背部へ向かっての紐ずれの痕跡が明瞭に残っている。この石庖丁使用痕で特記されるのは、背の双孔間に指でおさえられたために生じたのではないかと推測される浅くかすかな磨耗痕が遺存している点である。これは、裏面の双孔の間で、右孔の位置に寄った背部から裏面平坦部にかけてあり、左が浅く右に深い磨耗痕である。紐を通して石庖丁を握った指が、丁度、表面から背部を越して裏面へ斜めにかかる位置である。他に類例がないので、これを確実に指がかりの痕とは断定し得ないが、幾千回かの磨擦で生じた浅い磨耗痕である。刃部裏面の剝離は、穂摘みの収穫用具として使用された痕跡であるとは認め難いようである。

以上二個の石庖丁の観察結果と他の例から、その製作工程と使用方法を復原しておこう。

大邱市山格洞や日本・福岡県立岩の例をも参考として、石庖丁の作業工程を復原すると次のようになる。

- (1) 原石を粗く割って、石庖丁の原材とする。
- (2) これに打撃を加えて細かく剝離し、大まかな形を作る。
- (3) それを更に敲打して、ほぼ石庖丁といえる原形ができる。
- (4) これに粗砥をかけて研磨を開始する。
- (5) 粗砥を細砥に替えて刃つけを完了する。
- (6) 敲打または錐状工具の削磨によって穿孔を開始する。
- (7) 貫通した穿孔に錐をかねて穿孔を続け、孔径を大きくする。
- (8) 全面に仕上げ砥をかけて調整する。

全作業が終了して石庖丁が完成すると、受給地に向けて送り出されたり、交換が行なわれる。

次に使用法を復原しておこう。

微細な使用痕の観察によると、裏面から穿孔を通して表面の右孔に出てきた紐は、凹みをつたって表面の左孔に達し、この孔を抜けて裏面に至る。裏面では、双孔からのびた一本の紐の二つの先端を、指が通る程度の遊びをもたせて結縛する。紐の遊びは、裏面上部の紐ずれの痕跡から、指を通した紐が背の肩線よりも上方に、いくらかのびる程度であったと推定できる。これら二つの片刃石庖丁では、表裏の紐ずれにこうした一定の法則性がある事実と表面に凹溝を設けた点や背部から裏面にかけての磨耗痕などからみて、一方の側でのみ穂摘みを行なったと推察し得る。使用者からみて、片刃のついたほうが手前で表面となり、その反対が裏面となった可能性が大である。石毛氏の石庖丁使用実験例でいえ

ば、第七図の二と第六図の一に近似する。但し、裏面の紐ずれが両者とも肩線にまで達しているから、第六図の一とは少し異なり、紐はもっと上、第一関節よりも上方にまで及んでいたと考えられる。想像を逞ましくすれば、稔りを迎え収穫に忙しい人々が右手に石庖丁を持ち、湿った革紐に中指を通して親指で穂首をおさえながら片刃の面で穂を摘みとる。左の掌に持ちきれないほど穂首が多くなるまで、次の穂から次の穂へと一心に摘みとる姿が鮮やかにうかんでくる。これら二個の石庖丁は、こうしたドラマが毎秋くり返されていたとでもいいかげんな様子で、陳列室のガラスケースの中にひっそりと静まっている。

おわりに、朝鮮の農耕文化の研究に対する訳者の希望を述べておきたい。日本の初期農耕の開始、或いは弥生時代の水稻栽培とも関連して、今後、朝鮮、日本双方で研究者が朝鮮の農耕文化を論じる機会は、一層多くなると考えられる。とりわけ石庖丁や抉入石斧など、日本と朝鮮とに共通して存在する石器が問題となることが予想される。朝鮮の農耕社会、農耕文化の実体を明らかにするために、農耕と深く結びついた石器を他の石器や土器と比較し、その相互関係や組み合わせなどを明らかにしてゆくことが望ましい。

また、こうした石器は、石材や製作法・形態や分布などにかんがりの斉一性を示している。おそらく一定の時期からは、石器の量産が行なわれ、これに携わる専門の工人集団が、各地域毎に存在したと考えられる。幸い、日本の北九州における今山の石斧・立

岩の石庖丁製造所址のような役割を果たしたと考えられる石器製造所址が、朝鮮南部で発見されている。それは、慶尚北道大邱市北区山格洞の燕巖山の南斜面にあり、夥しい量の石器が無文土器の破片と共にここかしこに顔をだしている。ここはすぐ前を琴湖江が流れ、背後には広い大邱盆地が控えており、交通の要衝である。石器製造所の立地として、申し分のない位置にあり、陸路・水路を経て各地に供給されたのであろう。将来、意識的に探索すればこのような石器製造所址を、なお各地に発見し得る可能性は多分に残っている、各地域で石器の材質を鑑定してその分布地域を確認し、調査・研究を進展させれば、当時の伝播範囲・流通経路・各地域ごとの中心地などをはじめとして、農耕社会・文化の実体を解明するための、多くの手がかりを得ることができよう。こうした地味ではあるが、遺構・遺物に即応した実証的な研究の積み重ねて、広い視野にたつて農耕文化をとらえ、研究することが望ましい。

本稿作製にあたり、金元龍先生には翻訳を校閲して戴き、その折一部分加筆訂正されたところがあつた。また、江坂輝彌先生には、本稿を紹介し、発表する機会を与えて戴くことができた。そして京都大学文学部考古学研究室の諸兄から多くの批評と教示を得ることができた。末尾ではあるが、記して感謝の意を表わしたい。

一九七三・一〇・二三

編者あとがき

本誌に韓国考古学界を代表する金元龍、金廷鶴両教授の日本古代文化との関連において最も興味ある問題の玉稿二篇を掲載できたことは実に意義あることである。金元龍教授の玉稿は韓国の学会誌に一昨年発表されたものであるが、岡内君に翻訳の労をとっていただくとともに、身辺多忙な金元龍教授に校訂補筆をお願いし、また京都大学の大学院博士課程で東アジアならびに韓国考古学を専攻する岡内君の忌憚のない意見を「あとがき」として、つけ加えてもらった。

金元龍教授も本論考の冒頭において記されているように、韓国内発見の石刀の既発見のものほとんどが偶然の機会に表面採集されたものなどが多く、伴出遺物など不明なものも多く、今日の形態分類とその変遷を確固たるものとするためには、伴出遺物の明確な資料が何一つなくても不足であり、今後の発掘調査によって発見される伴出遺物の明確な石刀資料による裏付がまたれる次第である。

金元龍教授は石刀（わが国では一般的に石庖丁と呼びならわされているが、用途は庖丁ではないので、正しくは庖丁型磨製石器と呼ぶべであらう。本稿では石刀と中国および韓国の呼び方を使用する）は山東半島を中心に繁栄した龍山文化が中国の東北地方に波及した時期に、黒色磨研石器とともに陸路を半島北部に伝播し、半島全域に拡がり、さらに日本の西北九州地方へ波及したも

のと考えられ、石毛直道氏が長江流域から稲作文化とともに西北九州ないしは韓国南部へ石刀が渡来したとする仮説は不自然であり、妥当でないとは批判されている。そして西谷正氏の指摘のように中国の東北地方を経て半島北都に到達したとする説を支持されている。

私も石刀の伝播系路に関しては金元龍教授、西谷正氏の推論は誤っていないと確信する。私は石刀、方柱状磨石斧とも龍山文化の各方面への波及とともに長江流域から浙江省海岸地帯を経て台湾にも波及し、また山東半島から遼東半島を経て、中国の東北地方へも拡散し、半島の北部から南部へと波及したのではないかと推考する。金元龍博士の指摘されたように仰詔文化の山西、河北を経て内蒙古自治区の林西方面から遼寧省北部を経て、吉林省方面からの咸鏡北道へのルートも考えられるところであり、前者の穀類は麦類であり、後者は粟、黍、稗の類であったかもしれない。私は半島北部に石刀とともに伝播した穀類は当時の気候環境から考えて、稲でないことは断言してよいのではないかと思うのである。そして長江方面への石刀の分布圏の拡大は周辺龍山文化の波及に伴う麦作の伝播と考えるべきであると思う次第である。

金元龍教授の本問題提起を一ステップとして、半島の考古学研究者の多くがこの問題に注目し、さらに多くの新資料の増加をまっして、石刀に伴う栽培植物の問題にまで、実証例が加って、言及される日が一日も早からんことを節望する次第である。